国定の高等小学読本に採用された衛生教材（後編）：戦前の子どもの教科書が映す衛生事情 その三

菅 修一¹⁾，辰野 直子²⁾，寺升 夕希³⁾，藤村 三枝⁴⁾

滋賀医科大学附属図書館

目 次

(Ⅰ－Ⅳ，第55巻3号)

Ⅰ. 高等小学読本の性格

Ⅱ. 高等小学校制度について

Ⅲ. 「傳染病」

Ⅳ. 「望遠鏡と顯微鏡」「バクテリア」

(以下，本号)

Ⅴ. 高等小学読本「女子用」教材「應急手當」

Ⅵ. 「統計」

Ⅶ. まとめ

(第55巻3号からのつづき)

Ⅴ. 高等小学読本「女子用」教材「應急手當」

1. 「女子用」教科書について

高等小学読本には、「女子用」として作られたものがある。

中村紀久二氏によると，第二期と第三期とに「女子用」教科書が存在するという¹⁵⁾。

この「女子用」教科書とはどのようなものであったのか，『高等小學讀本編纂趣意書』の附記には次のように記されている。

「女子のみを以て組織せる學級に用ふる爲，別に高等小學讀本女子用を編纂し，每巻六，七課乃至十課，比較的女子に親密ならざる課を省きて，特に女子に適切なる材料を加へたり」¹⁶⁾

実際に，第二期の「女子用」と「一般用」について，それぞれ巻三の目次部分を見比べた（表3）。なお，中村氏による同様の指摘がある¹⁵⁾。

「一般用」にはなく「女子用」の教材として書かれた「應急手當」がどのような内容であったのかを次に見ていくことにする。

表3. 第二期巻三の一般用・女子用で異なる教材

一般用		女子用	
第七課	ナポレオン（一）	第七課	慈善家キャサリン
第八課	ナポレオン（二）	第八課	應急手當
第一七課	青年會	第一七課	赤十字社總會の記
第一九課	新聞紙	第二〇課	台所
第二一課	柳生宗矩	第二一課	味噌と醤油
第二二課	推薦状，就職通知	第二二課	暑中見舞
第二七課	古武士の意氣	第二七課	小野寺十内の妻

2. 「應急手當」について

「應急手當」は，第二期の「女子用」教科書巻三（第二学年で使用）第八課の教材である。

冒頭に，応急手当の必要性について述べている。すなわち，「負傷や病氣は手當が後れると取返しのつかぬことがあるから，深夜又は不便の地で，醫師の間に合はぬことのあるから，一通りの應急手當を心得て置く必要がある」

このあと，日常生活で起こり得るさまざまなけがや病氣について，それぞれ具体的な対処方法を教授するかたちになっている。

けがや病氣については次の通りである。

- ・切創
- ・火傷，らんぷの火が衣服に燃え広がった場合
- ・溺水
- ・咽喉に骨のささった場合，咽喉に物がつまった場合
- ・耳の中に豆粒や虫が入った場合，目にごみの入った場合
- ・虫さされ，蝮にかまれた場合
- ・脳震盪，脳貧血
- ・中毒，食中毒
- ・痙攣

ごく身近なことから命に関わるほどのことまで，多彩な内容を取り扱っていることがわかる。

次に，ここで教授される手当の方法がどのようなものか，少し紹介する。

¹⁾ Shuichi SUGA：〒520-2192 滋賀県大津市瀬田月輪町。

²⁾ Naoko TATSUNO，³⁾ Yufuki TERAMASU，⁴⁾ Saeda FUJIMURA
(2008年9月20日 受理)

○火傷した場合

「直に油を塗る」

「冷水で冷やす」

「(水泡を生じた時は) 綺麗にした針で其の縁の方を刺して水氣を取り、硼酸軟膏を塗る」

○咽喉に骨のささった場合

「飯の塊か卵の黄味を丸呑にする」

「それで取れなければ、ピンセットで取る」

「取つた後は食鹽水で含嗽をする」

火傷やのどに骨がささった経験は、誰もが一度はあると思う。上記の手当のうち、火傷の場合の「冷水で冷やす」であるとか咽喉に骨の場合の「飯の塊」を「丸呑にする」といった方法については、筆者もやってみたことがあり、効果的であることもわかっている。他方、「硼酸軟膏を塗る」、「卵の黄味を丸呑にする」、「ピンセットで取る」といった方法については聞いたことがなく、一般的なものとは考えにくい。しかしながら、教科書で教授するという事は、当時は正しいとされた方法であり、一般に行われていたものだったのかもしれない。

また、次に示す「痙攣」の手当は非常にユニークである。
「先づ静かに床に就かせ、熱があれば頭を冷し、便通が無ければ灌腸を施す」

「(長く止まなければ) 芥子と鰯鮓粉を等分に交ぜたものを、湯か水でこねて、半紙に厚く二三寸四方にのばし、紙の間に挿んで、下腿の内側に五六分間貼る」

この手当の効果のほどはわからないが、人々の生活に根付いた“おばあちゃんの知恵袋”的な知識が教科書に書かれていることは、とても興味深い。

一方で、「溺水」のところでは人工呼吸法の説明をしていたり、「脳震盪」と「脳貧血」との対処方法の違いを説明していたり、救急救命の知識も教授しようとしていると考えられる。

当時の教授参考書にはこの課の要旨が次のように記されており、これらの手当が当時一般的なものであったことが伺える記述となっている。

「普通の負傷又は病氣に對する應急療法の一般を授け、薬品の取扱、手当の方法等に關する常識を高めんとするに在り」

また、教授上の注意として、「應急手当の諸方法は皆應用せしむることに努むべし」「應急手当と共に必要なるは民間薬の一般も亦補説し置くを良とす」といったことが述べられている¹⁷⁾。

ここで学んだ手当の方法を子どもたちが基本的な知識として身に付け、日常生活の中で起こり得る突発的なけ

がや病氣に、手に入る範囲の身近な材料で対処することができるよう、と考えられていたのではないだろうか。

3. 現代における「応急手当」

救急救命的な内容を持ちつつも、生活の知恵、民間療法的であった高等小学読本における「應急手當」だが、現代ではどの教科でどのような内容で教えられているのだろうか。

現行（1998年版）の「小学校学習指導要領」では、体育の〔第5学年及び第6学年〕2. 内容のG. 保健の項目に、「けがの防止について理解するとともに、けがなどの簡単な手当ができるようにする」と記されている。実際の教科書で確認してみると、「けがの防止」という章で、「②けがの手当のしかたを知ろう」として、軽いけがの手当と打撲、やけど、鼻血、熱中症の手当が取り上げられていた¹⁸⁾。また、「中学校学習指導要領」では、保健体育の保健分野2. 内容の「(3) 傷害の防止について理解を深めることができるようにする」に、「イ. 応急手当を適切に行うことによって、傷害の悪化を防止することができること」と記されている。次に実際の教科書を確認したところ、「傷害の防止」という章で、「④事故や傷害が発生したときの手当」「⑤意識がないときの手当」「⑥出血があるときの手当」「⑦外傷の手当」として、止血法や傷の手当、人工呼吸や心臓マッサージなどについて、図や写真を添えて詳しく説明してあった¹⁹⁾。

この中から、「⑦外傷の手当」にある「やけどの手当」について紹介する。

「①冷たい水で痛みがなくなるまで冷やします。

②水ぶくれはつぶさない。やけどをした部位に軟膏など何もぬらないようにします。

③ガーゼを当て、包帯をします。」

先に紹介した高等小学読本のものと比較すると、①については一致しているが、②についてはまるで正反対の内容になっていた。時代の変化が感じられて、大変興味深い。

現代における「応急手当」教材は、高等小学読本の教材に比べ、扱う内容は狭く深くなり、手当の方法はより専門的で医学的な内容になっているように思われた。

4. 「女子用」の読本教材としての「應急手當」の意義

「應急手當」という教材が、高等小学読本の、しかも「女子用」で取り扱われているということの意味を考えると、高等小学校の性格が大きく関わっているように思われる。中村氏がいうように、「上級の中等諸学校に

は進学できないが、さりとて義務教育だけでは満足できない大多数の一般大衆階層の子弟のために、完全教育ないしは社会生活への準備教育を与える機関²⁰⁾という性格をもつ高等小学校で、これから社会に出て行く子どもたちが身に付けるべき知識であるために「應急手當」は非常に実用的で身近な教材となっているのではないだろうか。また、この教材が「女子用」としてある理由は、教授されるさまざまな手当の方法のほとんどが、家庭で母親から教わるような内容であるからといえるのではないだろうか。

5. 「家事科」との関連：今後の課題として

国定教科書に対する、現場の評価を収めた意見報告²¹⁾を見ると、「家事科」（注：高等小学校における家事については文部省は『高等小學理科家事教科書』（第一学年から第三学年まで3冊）を大正3年から大正6年にかけて出版し、理科の一部として扱った。家事科として独立した教科として扱われたのは1919（大正8）年のことである²²⁾。）との関連について指摘している箇所があった。

「卷三第八課「應急手當」ヲ第一學年中ニ轉載スレバ第一學年用家事教科書中ノ第十九課「應急手當」ト連絡ヲトリテ授クルコトヲ得ルノ利アリ」（福島県師範学校）「第八課「應急手當」ハ家事科ニ於テ詳説シ此處ニテハ省略シテ他に適當ナルモノヲ入レタキモノナリ」（青森県女子師範学校）

この「家事科」とはどういった内容をもつもので、その中の「應急手當」がどのような教材であったのか、読本教材「應急手當」との関連を検証することを今後の課題としたい。

（分担：藤村三枝）

Ⅵ. 「統計」

この教材は、第二期の巻三、第三期の巻一に採用されている。筆者には、統計は算数・数学あるいは社会科の中で語られるものであるという思いがある。高等小学読本で示された統計とはどのようなものであったのだろうか。以下、この教材に日本の衛生事情の時代相を読みつつ、読本で伝えられている「統計」という教材を紹介する。

1. 教授参考書が記すところ

この教材についての教授参考書には次のような記述がある。第二期に対応するものでは「統計が社会萬般の施設の上に寄与する効果の如何に大なるかを知悉せるのが主眼である」²³⁾。第三期に対応するものでは「統計に関

する知識は比較的国民一般に貧弱であるといふので、最近しきりにその方面の普及に努力してをる。算術でグラフに関するものが特に重要な課程として尊重されるやうになつたのもこれである。そこで此の課では、つまり統計といふものがあらゆる方面に欠くべからざるものであることの所以を力説したものである」²⁴⁾。社会を見る視点を子どもたちに伝えようという意図があったのであろう。それは、国家主義的な観点からいうと国の力、国の勢いというものを子どもたちに伝え鼓舞するものであったのだろうか。近代産業の発達と資本主義経済の発展していく時代の要請もあったのだろう。

2. 人口

第二期（1911年（明治44）発行、以下「明治44年本」）では、「明治四十一年末帝國人口年齢圖」が掲載されている（図4）。本籍人口総数49,587,531／男25,045,506／女24,542,025と記されている。この図がだいたい二等辺三角形で、年齢により男女数に多少の増減があるが、国の人口増加が順当であるとしている。そして、異常な現象がない限り、いつでも二等辺三角形の形状になるとしている。

図4. 「明治四十一年末帝國人口年齢圖」掲載箇所
（第二期高等小学読本巻二 明治44年本から）

第三期（1926年（大正15）発行、以下「大正15年本」）においては、「大正九年十月一日施行せられたる第一回国勢調査の結果によれば、我が国内地の総人口は五千五百九十六萬余、中男子二千八百四萬、女子二千七百九十二萬にして、男子百人に対して女子九十九人六分に当る。…其の割合は略一定せり。」と述べているが、明治44年本のような図の掲載はない。

3. 出生・死亡の割合などを示す値

以下に示すものが、「その割合が年ごとに一定である」事象として、年次ごとの値が記されている。なお、明治44年本の示す各年次とは明治32年から明治41年（ただし、「人口十萬二付重罪被告人」については明治40年まで）の1年毎の値である。大正15年本については、大正4年から大正13年までの1年毎の値である。

- ・「人口百ニ付出生」3.2から3.7の間で推移（明治44年本）、3.2から3.6の間で推移（大正15年本）、なお平成17年²⁵⁾（注：以下、平成17年の数字は全て引用文献25）による）の出生率（人口千対）は8.4。
- ・「出生女百ニ付男」（注：明治44年本では「出生」といわず「生産」と表記）103から109の間で推移（明治44年本）、104から105の間で推移（大正15年本）、なお平成17年の女を100とする出生性比は男105.3。
- ・「出生百ニ付死産」8.9から9.7の間で推移（明治44年本）、5.9から7.4の間で推移（大正15年本）、なお平成17年の死産率（出産（出生＋死産）千対）は29.1。
- ・「人口百ニ付死亡」2.0から2.2の間で推移（明治44年本）、2.0から2.7の間で推移（大正15年本）、なお平成17年の死亡率（人口千対）は8.6。
- ・「人口千ニ付婚姻」6.7から9.3の間で推移（明治44年本）、7.9から9.8の間で推移（大正15年本）、なお平成17年の婚姻率（人口千対）は5.7。
- ・「人口千ニ付離婚」1.2から1.5の間で推移（明治44年本）、記載なし（大正15年本）、なお平成17年の離婚率（人口千対）は2.08。
- ・「人口一萬ニ付自殺」1.8から2.2の間で推移（明治44年本）、1.7から2.0の間で推移（大正15年本）なお、平成15年の自殺死亡率（人口10万対）25.5。
- ・「人口十萬ニ付重罪被告人」6.6から9.0の間で推移（明治44年本）、記載なし（大正15年本）。
- ・「火災一度ニ付罹災戸數」2.1から3.3の間で推移（明治44年本）、記載なし（大正15年本）。

4. グラフによる表現

数量の多少及び増減を一目瞭然に見ることができるように、線の長短、面積の大小、図に濃淡の色で分けて示すとして、次の2点を掲げている。

①「最近十箇年本邦出生及死亡」

棒グラフにより、出生数と死亡数を表示している。（注：第二期（明治44年本）では「出生」といわず「生産」と表記）第二期（明治44年本）では明治32年から明治41年についてのもの、第三期では大正4年から大正13

年についてのものである。第二期（明治44年）においては、当時グラフという言葉がなかったので、棒線の長さで比較した図の右側に「単線表」と記している（図5）。

図5.「単線表」と「曲線表」
（第二期高等小学読本巻二 明治44年本から）

②「明治四十一年死亡者年齢別（百分比例）」

一つの円の中の中心角の大きさにより表示された図の右側に「圓形表」と記されている（図6）。この円形表の例は第三期では「民有有租地地目別割合大正十三年」となっている。

図6.「圓形表」（第二期高等小学読本巻二 明治44年本から）

なお、第二期（明治44年本）においては、「最近十箇年本邦外国貿易」を折れ線で示す図の右側に「曲線表」と記している（図5）。

また、第二期（明治44年本）の大正3年修正版においては、第二期（明治44年本）にあった図の右側の「単

線表」「圓形表」「曲線表」という言葉はなくなっている。なお、明治44年発行の高等小学算術書ではグラフを「表図」と記していた。表図が尋常小学校に採用されるのは尋常小学算術書第5学年（1920（大正9）年）、同第6学年（1921（大正10）年）である。その修正趣意書（1922年）には「社会ノ進歩ニ伴ヒ統計的観念ノ養成ハ益々其ノ必要ヲ感ズルニ至レリ」と記している²⁶⁾。なお「グラフ」という用語が算術書に初めて現れるのは高等小学算術書第二学年（1924（大正13）年）である。

上記のように教科書から衛生事情を見ることができが、大正15年本についての教授参考書には、この教材が無味乾燥なものになるのではないかと危惧する意見が述べられている。そして、「教室内の一年間の温度の昇降表」とか「一学級の身体検査」といったもので、統計を読むこと以上に造り出すまでの指導を、と述べている²⁷⁾。当時の教員たちの意欲的な意識の片鱗が窺えて興味深かった。

なお、Iで紹介した中山研一氏はブログの中で、「近代的な統計方法の持つ社会的な意味を評価するなど、専門性への橋渡しも十分に意識されているように思われます²⁸⁾。」と評価している。

（分担：菅修一）

Ⅶ. まとめ

1. 高等小学読本の性格

高等小学読本の性格は総合読本的なものであった。なぜなら、高等小学校を終えて社会に出る子どもたちの勤労生活に対応するため、あるいは国民としての生活に必要な知識を習得させようとして、多方面の実用的な知識を子どもたちに得させようとしたからである。

2. 取り上げられた衛生教材

高等小学読本の性格から、国民生活・社会生活に役に立つ教材として、本稿で紹介したような応急手当や伝染病についての教材や統計教材も含まれていた。当時、教科としての「保健」はなかった。

3. 今後の課題

まず、国定第一期の高等小学読本を検証したい。さらに、時代を遡り、高等小学校が制度として位置づけられ

た、明治19年以降の明治検定期の高等小学読本についても検証したい。次に、尋常小学校の読本教科書についても検証したい。また、高等小学読本は理科・家事科等其他教科との連絡が意識されているので、関連教科の各教科書についても見てゆきたい。

付記：本稿について、松宮哲夫先生（前大阪教育大学教授）にご指導・校閲いただいた。記して感謝申し上げます。

（分担：菅修一）

引用文献

V 章

- 15) 中村紀久二. 復刻国定高等小学読本解説. 東京:大空社;1991.p.16-21.
- 16) 荻野素助. 高等小學讀本教授参考書後編. 甲府:荻野素助;1913.p.98.
- 17) 萬福直清. 女子用並第三學年用高等小学読本解説. 東京:萬福直清;1913.p.76.
- 18) 大津一義, 阿部茂明, 市野聖治, 江口篤寿, 衛藤隆, 小野かつきほか. 新版たのしい保健5・6年生. 東京:大日本図書;2005.p.6-7.
- 19) 高石昌弘, 細江文利, 阿部茂明, 池田延行, 市野聖治, 稲葉裕ほか. 新版中学校保健体育. 東京:大日本図書;2006.p.84-92.
- 20) 前掲15) p.16-21.
- 21) 文部省. 國定教科書意見報告彙纂第四輯. 東京:文部大臣官房図書課;1915.p.148-54.
- 22) 海後宗臣. 日本教科書大系近代編第二十七卷習字その他. 東京:講談社;1967.p.535.

Ⅵ 章

- 23) 荻野素助, 入江保. 高等小學讀本教授参考書前編. 甲府:荻野素助;1912.p.207.
- 24) 大杉謹一, 岩村博. 高等小學新讀本解説卷一. 東京:明治図書;1926.p.353.
- 25) 厚生労働省大臣官房統計情報部編. 平成17年人口動態統計上巻. 東京:厚生統計協会;2007.
- 26) 松宮哲夫. 高等小学校におけるグラフ・函数教授について. 数学教育研究(大阪教育大学数学教室) 1990;20:103-13.
- 27) 前掲23) p.353-4.
- 28) 中山研一. 昔の高等小学読本[Internet]. <http://knakayam.exblog.jp/4234085/>[accessed 2008-06-12]